

ビルマ仏教のゆくえ

——人々の苦しみに応えて——

馬島 浄 圭

ビルマ仏教のアウトライン

仏滅後、僧伽が分裂した部派仏教時代の一長老比丘集団⇨上座部の流れを汲み、出家中心の戒律主義の立場を堅持する。他方、歴史的・風土的・民族的な特性に影響され多様な変容を遂げた側面も併せ持つ。ビルマ（ミャンマー）における上座仏教の確立は一一世紀のバガン時代と見られている。上ビルマで初めてビルマ族による統一王朝を打ち立てたアノーヤター王が、制圧したモン族の地よりパーリー三蔵をもたらし（一〇五七年）ことに始まるという。東南アジア特有の上座仏教は、スリランカ、タイ、ラオス、カンボジアなどにも流布している。

親元を離れ出家得度し見習い僧を経て、正規の僧侶となる。この間、段階を経て村の寺、地方寺院、都市部の名門僧院、仏教大学などで、パーリー仏典に依る三蔵（経・律・論）を学習し、三学（戒・定・慧）を修める。

ビルマ（ミャンマー）の総人口は二〇〇三年の軍政の統計で五七五〇万人となっている。仏教徒の占める割合は国民の八〇パーセント強。その内、僧侶は一九万二四五九人、見習い僧は二六万八二七八人、尼僧（正式の僧侶と認められてない）二万八一二〇人、僧尼合わせるとその総数は四九万人にのぼると見られている。また、僧院数は五万二九五三、尼僧院は二六二一を数える。

ビルマ仏教は、戒律を守る度合いの軽重の差から分派がみられる。主流はトゥーダンマ派・シェエジン派の二派で、細部の戒律に寛容なトゥーダンマ派の僧侶が全体の九割近くを占める。現在、この二派を含む九派が公認されている。ちなみにパゴダ（仏塔）はビルマ仏教のシンボルになっているが、僧侶が住んでいるわけでも管理しているわけでもなく、あくまで在家信者が管理する仏陀信仰のモニュメント的な建造物である。そこはまた、輪廻転生と因果応報を信じ現世利益を願う人々の、多様なニーズを満たす開かれた信仰と憩いの場でもある。

◎人々の生活と仏教

一日、一週間、一ヶ月、一年、人生という人々の生活のサイクルの中で、仏教の教えや儀礼が根付いていて、パゴダや僧院・僧侶との双方向関係が密接に保たれている。僧侶の修行生活は在家の喜捨によって支えられ、それは衣食住のすべてにわたる。在家は喜捨という行為を通して功德を積み、この善業によって現世利益や後生善処が叶えられと信じている。

早朝の托鉢

僧侶たちにとって、日々の托鉢は修行の一環というだけでなく、人々の暮らしぶりに触れる大切な機会にもなっている。訪れる家の衣食住が足りているかどうかは、お鉢に供養される食事の内容でおよそ実感できる。

二〇〇七年九月、僧侶たちが疲弊する民衆の嘆きの声を代弁するかのようにして立ち上がったのも、人々の苦しみと日々向き合っていればこそである。

年中行事と通過儀礼

月の満ち欠けに因んだ月四度の精進日には、戒律を守り、パゴダや僧院に詣でたり、瞑想をしたりする。ことに満月の日は、重要な仏事が重なる。ビルマ暦の新年（四月中旬ごろ）を迎える水かけ祭り、仏陀が誕生し入滅したとす

るカソン月（五月）祭り、雨安居（七月中旬から九月中旬の三ヶ月間）明けの行事などがそれである。

出産・結婚・葬式にまつわる通過儀礼もあり、中でも男子の得度式は特に重要視されている。人々はこのような年中行事や通過儀礼に際し、僧侶を招いて馳走し、法話を聞き、護呪経（バリッタ）を唱えてもらい、現世利益や後生善処を願う。そしてその節目ごと仏教徒としての認識を新たにしながら、次世代に信仰相続させている。当然のこととして僧侶に対する尊崇の念も篤くなる。軍政関係者にしても、篤信な仏教徒であることをこぞって国民にアピールしている。

◎政治と向き合う仏教

一九六二年のネウインの軍事クーデターより数えれば、軍政支配はやがて五〇年になる。このような国では、どんなに無関心でいようとしても政治は向こうからかかわってくる。僧侶だけ例外というわけに行かない。まして、仏陀の教えに忠実であろうとすれば、政治悪と向き合わずにはいられないはず。篤信な仏教徒としてふるまう為政者たちの喜捨に甘んじているばかりなら、ビルマ仏教に未来はないだろう。いくら制度や法律を駆使して僧侶への統制を強めても、内なる心までは縛れない。

二〇一一年一〇月中旬、現政権のトップの恩赦令により六三五九人の囚人が釈放された。このうち僧侶二九人を含む二四〇人の政治囚が解放されている。タイ・メソットに事務局を置くビルマ政治囚支援協会（AAPPIB）の二〇一一年八月の報告では政治囚の総数は一九九八人、僧侶は二二二人になっている。差し引きすると一七五八人の政治囚が今なお獄につながれていることになる。僧侶も一九三人。先の恩赦で解放された僧侶ウ・トンダヤ師は一九八八年以来実に二三年に渡って獄中生活を送ってきた。解放時のインタビューに答えて、テイン・セイン新政権についてはにわかには信じがたい。注意深く観察しながら、自らは森林の保全にかかわっていききたいとにこやかに語っていた。

◎人々の苦しみに応えて

軍政下ビルマで日々の暮らしに窮する人々を前にして、ボランティア活動に取り組み僧侶が増えている。貧しい家庭の子供たちを対象にした寺子屋教育や、内戦で親を亡くした子供たちを引き取って面倒を見ている僧院、地域の貧困層を対象とした診療所、職業訓練、HIV患者のターミナルケア、環境保全活動、民主化活動家たちの祈りの場の提供など、様々なニーズに応えている。

軍政批判も交えたわかりやすい法話で、人々に人気のあるウ・トゥミンガラ師は様々なボランティアグループを繋げネットワークさせる活動を開始している。アウンサンスーチー氏とその支持者たちの精力的な活動と相まって、仏陀の教えを行動にうつす僧侶たちの存在は、ビルマ仏教のダイナミズムを秘めていて目が離せない。

資料1

州首相（知事）宛

二〇一一年一〇月二四日付け

麻薬撲滅問題について

発展が遅延している少数民族の教育、保健、経済、交通など社会経済の発展のために協力しなければならない。

（憲法第一章国家基本方針二二項（八）参照）

シャン州北部、ムセー、ナムカン、クツカインとバラウン自治区のマンドンといった郡において、多くの少数民族

が麻薬にかかわっているのはたいへん憂慮される事態。

麻薬を使用している人間が増えることで、家庭が崩壊し、学校に通うべき子供たちが食い扶持を求め学校に行けない状況がある。

世帯主が自ら麻薬に犯されている場合、まだ年端もいかな子供たちが、家族を食べさせるために国境を越えて他国で得られる仕事をしているケースもある。

娘の場合も同様に得られる仕事をして、身を持ち崩すこともあり、その中には感染症に罹りそれを村落に持ち込む場合もある。

マンドン郡の場合、ある村では四〇世帯のうち、麻薬を使用している者のいない家は二世帯のみといったひどい状況にあるところもある。

麻薬の常習者が増えるので、地域の生業であるラベツ（お茶）園や田畑を売りに出すという事態にもなっていて心穏やかではいられない。

出家者が仏法により教え諭しても、改善される状況がないため、州政府首相に協力を要請するものである。

我々は今の状況をたいへん憂慮しており、州首相におかれましては、麻薬撲滅のために以前にもまして取り組みを強化していただきたくお願いする次第です。

※この要請書はシャン州北部に居住する少数民族パラウンの僧侶たちが連名で州政府に提出したもので、入手したビルマ語原文の日本語訳である。

資料2

注・郵送はしません。あさつての面会で渡します。

お姉さん、

檀家ドー・タンタンエーに、個人的に祈り伝えたいメッセージは、慈愛ー仏法と平和の真の意味を見だし、無明の暗闇から早く解放たれることができますように。世俗の利益、出世間の利益が増大し、繁栄することができますように「ということです」。

ターワラ氏よ、伝えたいことは、何十年もの間、民主主義の本質が失われてしまっている、何十年もの間、民主主義の真価が損なわれてしまっているビルマ国民に、いわゆるpolitical surviving「政治的に生き延びること」、政治にかかわる精神に力がみなぎるよう、より一層目覚め、生気を取り戻せるよう、努力を続ける必要がある、ということ。シユー伯母さんを含む皆にも、一言で言うとなれば、ビルマ人一人一人の、民主主義、人権、公正さと自由、民主主義と人権の価値を実践する力の総体によって、ビルマの民主主義という目標に到達するまでの距離が決まると

いうことです。

人権とか、公平で自由である、ということも、要求して得られるものではありません。どれくらい実践したか、ということにかかっているのです。民主主義の基本的権利である、言論の自由、表現の自由、行動の自由、それら自分たちが実際に実践するのか、それとも、独裁政権が作り出した恐怖を引き続き受け入れるのか、どちらを選ぶのか、あり方というのは、「自ら」選ぶことによって定められる、と聞いたことがあります。

一人一人がそれぞれ集まり、五千万人余りの中から、一人一人が恐怖を取り除き、人間であれば本来そうであるように、誰に求めることなく、人間が本来享受することが許されている人権を、実際に実践しなければならないのです。何を恐れるのか。恐れというのは何か。誰が、恐れるよう、どうしているのか。なぜ恐れるよう威嚇するのか。怖がらせるままに怖がってやるのが真理なのか。皆で恐れていれば問題は解決するのか。より一層問題を大きくさせるのか。恐怖を受け入れていることで、何を失っているのか。

ウー・ゾーウェイジーがいつも言う「彼らは弾圧を受けた人たち。テロ活動はしないが、おとなしくうなだれる人たちではない。」という言葉が、何度も何度も、耳元に響くかのように聞こえています。

皆が健康で幸福でありますように。

慈愛をこめて

ウージン

アシン・ガンビラ

二〇一〇年一月一八日

※昨年の現宗件の中央教研会議で冒頭に紹介させていただいた、二〇〇七年のビルマにおける僧侶デモのリーダーの亡命僧アシン・ターワラ師より密かに送られてきた、アシン・ガンビラ師（デモを主導したため逮捕され六三年の刑を受け、チン州のカレー刑務所に投獄。健康を著しく害している）の手紙の日本語訳。